

「めぐろシティカレッジ」の20年と展望

—初心回帰と新たな展開に向けて—

めぐろシティカレッジ会長 堀 信行

めぐろシティカレッジは、創立20周年、人間ならば成人を迎えた。一気に疾走してきた20年だが、決して短くなかったと思う。この間、わが事として取り組んだ関係者の熱気と努力に感謝の念が込み上がる。と同時に、時間の経過は変化を余儀なくし、人は入れ替わり、人の心も変化するのが、世の常である。

めぐろシティカレッジ創設の契機は、首都大学東京の前身、東京都立大学が八王子市南大沢へ移転することで、目黒区から文化の拠点を失うことが危惧され、新たな文化の拠点創りが模索された。その結果、この地に残された東京都立大学附属高校（現在の桜修館中等教育学校）を活かし、大学は移転しても高校と大学の連携を図る生涯学習機構が考えられた。その企画に東京都教育委員会と目黒区教育委員会も加わり、高校と大学、そして両教育委員会の四者が合意の上で誕生したのが、めぐろシティカレッジである。

この20年間、紆余曲折はあったが、創立時の志を忘れていないと自負するのは、講座（カリキュラム）への取り組みである。毎年講座の内容は更新され、受講者の要望を汲みつつも、質の向上を目指し、新たな主題に挑戦し、それぞれの内容にふさわしい講師を見出し、お願いをするという地道な努力を積み重ねてきた。こうした過程を通じて、事務局の理解と熱意、受講者の期待感、それに応えんとする講師の心意気が、相互に刺激し合って、これまで続けてこられたように思う。学ぶ喜びを生む「知の力」は、「知の縁」で人間を結びつけ、地域社会を支え、育むと考え、それを実感してきた。

10年前に、めぐろシティカレッジ創立10年を回顧し、さらなる10年を展望するシンポジウムが開催された。その中で「これまでさまざまな問題を一つ一つ越えながら進んできたが、めぐろシティカレッジを今後、さらに10年続けるのは、厳しいと予想する」という趣旨のことが述べられている。それから10年、予想通りかなという思いと、その都度、関係者の努力と心意気で乗り越えてきたという思いが交錯する。

「初心忘るべからず」、能樂の世阿弥が1424年に著した『花鏡（かきょう）』の中の語である。芸の未熟期に修得した境地、未熟さを常に自覚し、各時期に得た境地を初心として。「初心忘るべからず。時々の初心忘るべからず」という。めぐろシティカレッジは、創立20年を経た今、改めてこの言葉を反芻する状況にある。記念誌刊行の意義は大きく、深く、重い。この記念誌が将来への礎となれば幸いである。